

戰國竹簡文字研究略説

福田 哲之

一、戰國文字研究と戰國竹簡の出土

戰國竹簡の大量出土により、近年、戰國文字研究は急速な進展を遂げている。本稿ではこうした状況を踏まえ、楚墓出土竹簡を中心に郭店楚簡出土以降の戰國竹簡文字に關する研究の概略を述べてみたい。

戰國文字研究は、古文字學における一領域に屬し、^① 秦の文字統一によって失われた戰國期の六國文字（古文）の實態解明をその主要なテーマとする。現在、廣く行なわれている戰國文字の地域区分は以下の五系であり、^② 本稿もこれに従う。

齊系（齊・魯等山東諸國）

燕系（燕國）

晉系（三晉・周・中山等中原諸國）

楚系（楚・曾・吳・越等南方諸國）

秦系（秦國）

古文字學は、同時代の第一次資料を主たる検討の対象とし、戰國文字研究は、從來、戰國期の金文・璽印・陶文・貨幣文などによって進められてきた。ところが一九五〇年代以降、新たに竹簡が加わり、そ

の後の相次ぐ出土によって、戰國文字研究の中心的な位置を占めるに至った。中華人民共和國建國後から現在までに出土した戰國簡は、楚（曾を含む）の領域から出土した楚簡（以下、楚簡の語はこの定義に従う）と秦の領域から出土した秦簡とに二大別される。そのうち主な楚簡を出土（收藏）年順に列記すると以下のとおりである（資料名／出土年／出土地／文獻性質／墓葬年代／報告書の順に記載）。

①五里牌楚簡／一九五一年出土／湖南省・長沙五里牌四〇六號楚墓／遣策／戰國後期／中國科學院考古研究所『長沙發掘報告』（科學出版社、一九五七年）

②仰天湖楚簡／一九五三年出土／湖南省・長沙仰天湖二十五號楚墓／遣策／戰國中期頃／史樹青『長沙仰天湖出土楚簡研究』（羣聯出版社、一九五五年）・湖南省博物館湖南省文物考古研究所長沙市博物館長沙市文物考古研究所『長沙楚墓』上・下（文物出版社、二〇〇〇年）

③楊家灣楚簡／一九五四年出土／湖南省・長沙楊家灣六號楚墓／性質待考／戰國後期／湖南省博物館湖南省文物考古研究所長沙市博物館長沙市文物考古研究所『長沙楚墓』上・下（文物出版社、

- 二〇〇〇年)
- ④ 信陽楚簡／一九五七年出土／河南省・信陽長臺關一號楚墓／遺策・書籍類／戰國中期／河南省文物研究所『信陽楚墓』(文物出版社、一九八六年)
- ⑤ 望山楚簡／一九六五年出土／湖北省・江陵望山一號・二號楚墓／禱辭・遺策／戰國中期後半／湖北省文物考古研究所『江陵望山沙塚楚墓』(文物出版社、一九九六年)
- ⑥ 曾侯乙墓竹簡／一九七八年出土／湖北省・隨州擂鼓墩一號(曾侯乙)墓／遺策／戰國前期(前四三三)／湖北省博物館『曾侯乙墓』上・下(文物出版社、一九八九年)
- ⑦ 九店楚簡／一九八一年出土／湖北省・江陵九店五十六號楚墓／日書／戰國中期後半／湖北省文物考古研究所『江陵九店東周墓』(科學出版社、一九九五年)
- ⑧ 包山楚簡／一九八七年／湖北省・荊門包山二號楚墓／記事・禱辭・遺策／戰國中期末(前三二六)／湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚簡』(文物出版社、一九九一年)・湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』(文物出版社、一九九一年)
- ⑨ 郭店楚簡／一九九三年出土／湖北省・荊門郭店一號楚墓／書籍類／戰國中期後半／荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』(文物出版社、一九九八年)
- ⑩ 上海博物館藏戰國楚簡／一九九四年收藏／出土地不明(湖北省?)／書籍類／戰國中期後半(炭素測定前三〇八±六五)／馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(一)』(上海古籍出版社、

二〇〇一年)、『上海博物館藏戰國楚竹書(九)』(上海古籍出版社、二〇一二年)まで刊行

⑪ 新蔡葛陵楚簡／一九九四年出土／河南省・新蔡葛陵楚墓／禱辭・遺策／戰國中期(前三四〇頃)／河南省文物考古研究所『新蔡葛陵楚墓』(大象出版社、二〇〇三年)

⑫ 清華大學藏戰國竹簡／二〇〇八年收藏／出土地不明／書籍類／戰國中期後半(炭素測定前三〇五±三〇)／清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』(中西書局、二〇一〇年)、『清華大學藏戰國竹簡(陸)』(中西書局、二〇一六年)まで刊行

五十年代から六十年代にかけて出土した楚簡は、數量も限られ保存状態もよくなかったため、釋讀は困難をきわめたが、その後、一九七八年出土の⑥曾侯乙墓竹簡や一九八七年出土の⑧包山楚簡などによって數量・保存状態の両面で資料が充實し、楚文字に關する知見も増加していった。そして一九九三年出土の⑨郭店楚簡により、戰國文字研究は新たな段階を迎えることになった。

郭店楚簡(以下、郭店簡と略記)は、墓葬年代との關連から戰國中期後半以前の書寫と推定され、簡長・字體・内容などから、十六種の文獻に分類される。このうち『老子』(甲・乙・丙)と『太一生水』は道家、その他の『緇衣』『魯穆公問子思』『窮達以時』『五行』『唐虞之道』『忠信之道』『成之聞之』『尊德義』『性自命出』『六德』『語叢一』『語叢二』『語叢三』は儒家を中心とする著作、『語叢四』は遊説家にかかわる著作と見なされ、『老子』と『緇衣』以外はすでに散佚した

佚書であった^④。郭店簡の戰國文字研究上の意義として、とくに以下の二點があげられる。

第一は、思想文獻を中心とする書籍類からなり、それまでに知られなかった多様な語彙や用例が得られた點である。金文や璽印などは、青銅器銘文や印章といった特別な用途の文字資料であり、多くが形式的な内容で語彙も限られていた。また郭店以前に出土した楚簡も^④信陽楚簡の一部を除いて、すべて公的・実用的な文書類であり、多種多様な内容をもつ書籍類に比べれば、やはり一定範囲の語彙にとどまっていた。例えば次章で取り上げる「われ」を意味する第一人稱は、郭店以前の文書類の楚簡には一例もみられなかったが、オフィシャルな文書類に第一人稱が登場しにくいという事情を勘案すれば、書籍類における語彙の多様さが了解されよう。

第二は、郭店簡の中に『老子』や『緇衣』のような傳世文獻に對應する書籍が含まれており、相互の比較による楚文字と現行文字との對照（對讀）が可能となった點である。李零氏がその本質を「楚書秦讀」と稱するように^⑤、楚文字を釋讀するという行爲は、楚文字で書かれたテキストを現行の漢字のもとになった秦の方式に従って讀むことにほかならない。したがって、傳世文獻との對讀が可能な郭店『老子』や郭店『緇衣』は、まさに願っても無い好條件をそなえた資料といえるのである。また古佚文獻である馬王堆帛書『五行篇』も秦の文字を繼承した漢代の隸書で書寫されたテキストという點で、郭店『五行』との間に同様の關係が成り立つ。さらに楚簡中の文章の一部が傳世文獻と合致するような場合も、釋讀の貴重な手がかりとなる^⑥。

戰國竹簡の大量出土によって、それまで限定された範囲にとどまっていた楚文字の釋讀は急速に進展し、今や「大規模識字」の段階に入つたとされる^⑦。それに伴って戰國竹簡を中心とする古文字研究にも新たな變化がもたらされた。以下では具體的な事例を紹介しながら、郭店以後の戰國文字研究の展開をみていこう。

一、古文字分析の轉換

まず本章では「虚」字の釋讀を取り上げる。これは郭店簡によって釋讀が確定した代表的な例のひとつであり、先行書においても言及されているが^⑧、ここでは金文や璽印など他の古文字資料との關連も視野に入れながら、郭店前後における古文字分析の轉換という觀點から釋讀の過程をたどってみたい。

はじめに郭店以前の事例として、李家浩氏の研究をみていく。「虚」字については、楚簡の用例が知られる以前、曾姬無卣壺銘文と古璽の用例が知られていた。前者は一九三〇年代に安徽省壽縣朱家集楚王墓から出土したと伝えられる青銅器の銘文であるが、當該文字「圖1」が難讀箇所中に存在したこともあって研究者により解釋が異なり、「虚」と隸定した唐蘭氏の見解に對して、「望」と讀む郭沫若氏の説が廣く行なわれていた^⑨。一方、古璽は「虚丘」や「分虚」「圖2」など、いずれも姓字（複姓）中の用例であり、音義に關する十分な情報を得ることができなかった。

〔圖1〕



〔圖2〕



そうしたなかで「虚」字の検討を促す一つの轉機となったのが、一九五七年出土の④信陽楚簡である。信陽楚簡は、ある人物と周公との問答を記した書籍（第一組¹⁴）、副葬品の名稱や數量を記した遺策（第二組）の二組の竹簡からなり、「虚」字は第一組竹簡の二箇所（簡一二〔圖3〕・簡一四）にみられた。この第一組竹簡は、發掘調査によるはじめての書籍簡の出土として注目されたが、残念なことに完全な簡が一簡もなく、大半が小片の殘簡でほとんど通讀し難い状態であった。以下に、郭店以前に發表された劉雨氏の釋文により用例を示しておこう。¹⁵

〔圖3〕 信陽楚簡（第一組）簡一二



……天君天下虚₁辭（聞）周公……簡一二
 ……虚₁哉、不智也、夫周公……簡一四

李家浩氏は信陽楚簡および古璽の用例から、曾姬無卹壺銘文中の當該字は唐蘭氏の隸定「虚」に従うべきであるとし、信陽楚簡の用例について以下のような分析を加えた。まず問答相手の發言中に出てくる

「虚」を問答相手自身の名、周公の發言中に出てくる「易」（簡一・簡七・簡九）を問答相手の字と推定し、名と字との意義上の連繫から、「虚」は、「易」や「易」の形聲字と字義上の共通性をもつ「王」を聲符とする、との結論を導いた。そして、それを前提に曾姬無卹壺の「虚」を「王」と字音の關係が密接な「鎮」の義としたのである。¹⁶

以上の分析の過程を簡略に圖示すると以下になるろう。

- （1）文字構成の分析 ……「虎+王」
- ←
- （2）聲符の認定 ……「王聲」（耕部）
- ←
- （3）現行文字への讀み換え……「鎮」

それでは郭店簡における「虚」字の分析はどのように行なわれたのであろうか。郭店簡には「虚」の用例が十五例あり、『老子』や『緇衣』との對讀などによって、そのうちの十二例が第一人稱の「吾」に釋讀された。¹⁷ 具體例として、郭店『老子』乙簡七〔圖4〕と馬王堆帛書および現行本（王弼本）との對應箇所をあげておこう。

〔圖4〕 郭店『老子』乙簡七（部分）



虚₁所以又（有）大患者、爲虚₁又（有）身。 郭店乙簡七

吾所以有大梃(患)者、爲吾有身也。 帛書甲本 113—114

吾所以有大患者、爲吾有身也。 帛書乙本 228 上

吾所以有大患者、爲吾有身。 王弼本第十三章

こうして「虚」が「吾」に釋讀されることが疑問の餘地なく裏付けられ、楚では第一人稱に「虚」が用いられていたことが明らかとなった。その結果「虚」の聲符は「王」(耕部)ではなく、「吾」(魚部)と音の近い「虎」(虎部)であることが判明した。さらに文字構成についても、従来考えられてきた「虎」と「王」との組み合わせではなく、「虎」に判別の符號として二畫を加えた繁文¹⁸、または「虎」と音の近い「土」(魚部)との合成字と見なされている¹⁹。

同様に以上の分析の過程を圖示してみよう。

(3) 現行文字への読み換え……「吾」

←

(2) 聲符の認定 ……「虎(虎)聲」(魚部)

←

(1) 文字構成の分析……「虎十=(符号)」または「虎十土」

先に敢えて李家浩氏の見解を紹介したのは、その當否を問題にするためではなく、郭店の前後で古文字分析の方法に轉換が生じたことを指摘したからである。

郭店以前においては資料の制約から大量の未釋字が存在し、必然的

に(1)↓(2)↓(3)という、複数の用例にもとづく歸納的分析が中心的な位置を占めていた。もちろん研究者の努力によって一定の成果があげられたが、いかに精緻な分析が加えられたとしても各段階で推測の混入を排除することはできず、そのため最終的に導かれた結論の妥當性を判定する明確な基準が得られないまま、複数の異説が竝立するという手詰まり状態におちいる場合が少なくなかった。これに對して郭店以後の(3)↓(2)↓(1)は、傳世文獻との對讀などによる現行文字への読み換えを起點とした演繹的分析により、確度の高い検討が可能となったのである。

このような變化は、郭店以前の分析が“未釋字をどう讀むか”に力點を置いていたのに對し、郭店以後は、すでに讀みの明らかかな文字について“なぜそのように讀まれるのか”に力點が移行したことを示している。

さらに注目されるのは、郭店簡による「虚」字の用義の確定が、曾姬無卣壺銘文の再検討を促し²⁰、古璽の釋讀に進展をもたらしたことである。こうした他の古文字資料への影響という點も、郭店以後に顯著になってきた現象の一つとして注目される。傳世文獻との對讀などで確定された讀みを起點とすることによって、甲骨文や金文・璽印などの未釋字や待考字に解決の糸口がもたらされ、相互の緊密な連繫のもとに古文字研究が進展するという、新たなシステムが構築されたのである。

三、用字習慣の解明

郭店以後の變化としてもうひとつ注目されるのは、各系(國)間における文字の形體上の違い「文字異形」から、文字の用いられ方の違い「用字不同」を重視する傾向が顯著になってきたことである。⁽²¹⁾ここで先に取り上げた第一人稱を例に「用字不同」について少し説明を加えておこう。

郭店簡によって楚では第一人稱として「虚」が用いられたことが明らかとなったわけであるが、すでに郭店以前の段階で、秦では第一人稱に「吾(避・徂)」、齊や晉では「盧」が使用されたことが知られていた。ただし「吾」や「虚」の文字は、決して秦あるいは楚のみの地域に限定されたものではなく、楚や齊では「吾」が地名や姓字(複姓)の一部に、同じく晉でも「虚」が姓字(複姓)の一部に用いられた。⁽²²⁾つまり異なっていたのは、第一人稱にどの字を用いるかの違い、言い方を変えれば第一人稱の用字習慣の違いだったのである。⁽²³⁾こうした状況から、戦國文字の實態を把握するためには、各系(國)間における文字の形體上の違いにとどまらず、用字差異についての理解が不可欠であることが了解されよう。

それでは、郭店簡の用例をきっかけに用字習慣が解明された代表的な例として、「見」「視」兩字にかかわる裘錫圭氏の研究⁽²⁴⁾をみていこう。殷墟から出土した甲骨文には、以下のように「目」の下に跪座する人形を加えたAと「目」の下に直立する人形を加えたBとの兩種がある。従来この二者は同字異形とみなされ、すべて「見」と釋されている

た。

A 𠄎

B 𠄎

その後、研究の進展にともない、両者は字形とともに用法も異なる別個の文字であることが徐々に認識されてきていたが、「見」にあたるAに對して、Bがいかなる文字なのか明確な結論が得られていなかった。そこに重要な手がかりを提供したのが郭店簡である。

郭店簡には、Aにあたる𠄎(見)が十八例、Bにあたる𠄎(見)が十二例あり、検討の結果、一部の例外を除いてAは「見」字、Bは「視」字に對應し、兩字が使い分けられていることが明らかとなった。⁽²⁵⁾以下に具體例として、王弼本第三十五章「視之不足見、聽之不足聞」に對應する郭店『老子』丙簡五「圖5」をあげておこう。

〔圖5〕郭店『老子』丙簡五(部分)



この發見によって、楚系資料における兩字の使い分けが明瞭に認識された。例えば包山楚簡では「見」の五例はすべて動詞「見」にあたるのに對し、「見」の五例はすべて「見日」という二字熟語に用いられ、傳世文獻中の專用語(官職名)「視日」に對應する。⁽²⁶⁾こうして「見」

にあたる甲骨文Aに對して甲骨文Bは「視」と釋され、形聲字「視」の初文であることが判明した。甲骨文・楚簡・現行文字の對應關係を以下に整理しておこう。

A 𠄎 — 𠄎 (見) — 「見」
B 𠄎 — 𠄎 (見) — 「視」

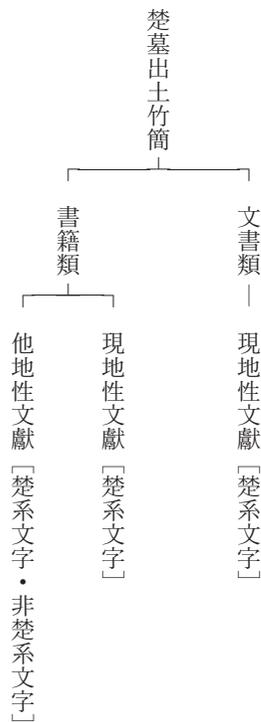
さらに、甲骨文における「見」「視」の用字が明らかにされたことにより、春秋末から戰國期にかけて、楚以外の他系(國)では兩字の使い分けに混同が生じ、最終的に本来「視」をあらわしていた「見」が「見」の専用字となり、それにかわって新たに「視」をあらわす形聲字が定着していったことが通時的に解明されたのである²⁷⁾。

四、現地性文獻と他地性文獻

前章までにおいて、第一人稱「虚」字の使用や「見」「視」兩字の使い分けなど、楚の用字を中心に紹介してきたが、郭店以後に出土した楚簡は、楚系文字のみならず齊や晉といった他系(國)文字についても多くの情報を提供し、地域差にかかわる國別研究の進展をもたらしている。ここからはそうした楚簡による國別研究を取り上げてみよう。

いったい楚墓から出土した楚簡が、なぜ他系(國)文字を考察する資料になるのだろうか。この問いに答えるには、まず楚墓出土竹簡

の文獻的性格について説明する必要がある²⁸⁾。楚墓出土竹簡はその内容から、以下のように文書類と書籍類とに大別される。



文書類は、遺策・日書・卜筮祭禱記録など、副葬品のリストや墓主の日常生活・職務などにかかわる記録で、主として墓主の周邊で作成された現地性文獻であり、そこには通行の楚系文字が用いられた。

一方、書籍類は、藏書など墓主にかかわる書物を中心とするが、それらが著作された地域との關係から、さらに現地性文獻と他地性文獻とに區分される。前者は、楚で著作された書物であり、楚王の故事などが含まれ、そこには文書類と同様、楚系文字が用いられた。これに對して後者の他地性文獻は、楚以外の地域で著作され、後に楚に傳わった書物であり、『易』や『尚書』などの經書、孔子や弟子の言行を記した儒家系文獻、さらに他國の事件や戰爭を記録した歴史書などが含まれる。そして重要な點は、これらの他地性文獻の一部に、楚系文字とは異質の非楚系文字の混在が認められることである。

先に掲げた楚簡のうち、書籍類に屬するのは以下の四資料である。

④ 信陽楚簡（文書類を含む）

⑨ 郭店楚簡

⑩ 上海博物館藏戰國楚簡（非發掘簡）

⑫ 清華大學藏戰國竹簡（非發掘簡）

上述のように、信陽楚簡の書籍類については、竹簡の數量および保存状態の両面で十分な研究を進めることができず、書籍類の本格的な研究は郭店簡によって開始された。研究の進展にともない、郭店簡のなかに、楚系金文やそれ以前に出土した楚簡（文書類）の分析によって知られていた楚系文字とは性格の異なる、非楚系文字が混在するところが明らかとなり、楚墓出土書籍簡における國別問題がクローズアップされた。

この問題に關する先驅的な研究として、周鳳五氏の論文²⁹⁾を取り上げよう。周氏は、郭店簡の思想内容を「子思學派」を主體とし、孟子・道家・陰陽術數家の思想を交えたものとして、齊國の稷下の學との密接な關連を指摘する。同時に、字體の觀點から郭店簡を四類に分け、各類の特徴を以下のように分析している。

第一類 『老子甲』『老子乙』『老子丙』『太一生水』『五行』『緇衣』

『魯穆公問子思』『窮達以時』『語叢四』

第一類は楚國の簡帛に常見され、字形構造は楚國文字本來のもので、書法體勢は「科斗文」の特徴を帯び、楚國簡帛の標準字體と言えらる。

第二類 『性自命出』『成之聞之』『尊德義』『六德』

第二類は齊・魯の儒家經典の寫本より出たものであるが、すで

に楚國の「馴化」を被っており、「鳥蟲書」の筆勢が形成する「豐中首尾銳」の特徴を帯び、兩漢以降の『魏三體石經』『汗簡』『古文四聲韻』所載の「古文」のもとづくところである。

第三類 『語叢一』『語叢二』『語叢三』

第三類は用筆が小篆と類似し、服虔の見た「古文篆書」と比較的接近しており、戰國時代の齊・魯の儒家經典の文字の本來の様相を示している。

第四類 『唐虞之道』『忠信之道』

第四類は齊國文字の特徴と最も吻合し、楚國の學者が新近に齊國より傳寫・導入した儒家典籍であり、齊國文字の形體構造と書法風格とをより多く保存している。

周氏は、齊・魯で成立した文獻が楚に流傳し轉寫される際、もとのテキストに用いられた齊・魯の文字が楚の文字に書き換えられていく現象を「馴化」という語でとらえ、郭店簡の字體分類との對應を踏まえて、馴化が最も進行し典型的な楚國の通行體で書寫された第一類から、未だ馴化が十分になされず齊國文字を多く保存する第四類へと、その度合いをほぼ段階的に把握している。

この周氏の見解は斬新で示唆に富むものであったが、分類の據り所となった「科斗文」「鳥蟲書」「古文篆書」などはすべて文獻資料中にみえる字體名稱であり、その實體を明確に把握することができないという問題點が指摘された。また郭店簡にみえる非楚系要素と齊・魯の文字との關係についても、さらなる檢證が必要とされたのである。³⁰⁾

五、國別研究の進展（一）

― 郭店簡『緇衣』と上博簡『緇衣』

こうした状況の中で國別研究をさらに進展させる契機となったのが、上海博物館藏戰國楚竹書（以下、上博簡と略記）の発見である。上博簡は上海博物館が一九九四年に香港の骨董市場から購入した竹簡で總數一二〇〇餘簡、内容はすべて書籍で儒家・道家・兵家・雜家など八十餘種におよび、そのなかには楚王故事など郭店簡には見られなかった現地性の書籍も含まれていた。³¹⁾

國別研究の観点からとくに注目されたのが『緇衣』（以下、上博『緇衣』と略記）である。この文献は現行の『禮記』緇衣篇に該當し、先に出土した郭店簡にも含まれていた（以下、郭店『緇衣』と略記）。そして郭店『緇衣』と上博『緇衣』とを比較した結果、前者が楚系文字で書寫されているのに對し、後者にはそれとは異なる濃厚な非楚系の要素が認められ、同じ戰國期の『緇衣』でありながら、そこに用いられた文字には明瞭な地域差のあることが判明したのである。つまり、現行本との對讀が可能で、同時に楚系文字と非楚系文字との二種のテキストの比較分析もできるといふ、きわめて好都合な研究資料が提供されたわけであり、それはちょうどギリシャ文字とエジプト聖刻文字（ヒエログリフ）・エジプト民衆文字（デモティック）の三者を對譯したロゼッタストーン³²⁾の発見にも類する研究上の僥倖であった。

以下では馮勝君氏の研究³³⁾にもとづき、両者が相違する例を具體的にあげてみよう。まず個別の字形の相違では、例えば「いえ」をあら

わす文字として、楚では「家」の上部に「爪」のついた固有の「家」を使用し、楚以外の他系（國）では「爪」のない「家」を使用した³⁴⁾が、郭店『緇衣』簡二〇は楚系の「家」、上博『緇衣』簡一一には非楚系の「家」が用いられている〔圖6〕。

〔圖6〕「家」の比較

〔右〕郭店『緇衣』簡二〇（部分）／〔左〕上博『緇衣』簡一一（部分）
……邦家之不寧……



次に用字習慣の相違として、上述した「見」と「視」とをみると、郭店『緇衣』には「見」―「見」と「視」―「見」という甲骨文と同じ使い分けがみられたのに對し、上博『緇衣』では「見」に「見」、「視」に「眡」が使用され楚系とは異なる用字が認められた〔圖7〕。

〔圖7〕「見」「視」の比較

〔右〕郭店『緇衣』簡一九（部分）／〔左〕上博『緇衣』簡一一（部分）
……弗克見我既見……



〔右〕郭店『緇衣』簡二（部分）／〔左〕上博『緇衣』簡一（部分）
 ……曰（以）視民……



じつは郭店『五行』にも「見」をあらわす文字に「見」が用いられていたが、当初は楚系文字の内部における違例と解釋されていた。しかしその後の研究によって、郭店『五行』は全体的に楚の用字に従いながら、一部に非楚系要素を含むことが明らかとなり、³³⁾このような違例は基本的に他地性の文獻のみにもみえるもので、いずれもとのテキストにおける非楚系文字の影響とみなし得ることが判明した。こうして「見」と「視」との傳統的な使い分けを踏襲する楚系と、他系（國）との用字習慣の違いが明瞭に把握されたのである。

さらに馮勝君氏は、齊・魯の金文や陶文・璽印、魯の孔子舊宅から發現した壁中書に由来するとされる『説文解字』古文や魏の三體石經古文などの傳抄古文との詳細な比較分析をとおして、郭店『唐虞之道』『忠信之道』『語叢一』『語叢二』『語叢三』および上博『緇衣』が、齊系文字の特徴をそなえたテキストであることを明らかにしている。

ところで、これまで上博『緇衣』にみえる非楚系要素について述べてきたわけであるが、逆に楚系要素がまったくなければ、上博『緇衣』は齊系文字によるテキストそのものである可能性が生じることになる。この点については、上博『緇衣』が楚における馴化を受けたテキ

ストとみなされる證據として、簡一四と簡二三〔圖8〕との二箇所にもみえる第一人稱「虚」の用例を指摘することができる。

〔圖8〕上博『緇衣』簡二三（部分）
 ……不利虚（吾）弗信之矣。……



上述のように、戦國期における第一人稱の用字には地域差があり、齊では「虚」が用いられた。したがって上博『緇衣』が完全な齊系のテキストであれば、当然、この二箇所には「虚」が使用されなければならない。第一人稱「虚」の存在は、上博『緇衣』が齊の用字習慣を濃厚に残留しつつ、同時に楚の用字習慣による馴化を受けたテキストであることを示す一つの明確な痕跡とみなされる。³⁴⁾

このように郭店簡に續く上博簡の發見によって、書籍簡の來源にかかわる國別研究が大きく進展することになったのである。³⁵⁾

六、國別研究の進展（二）——清華簡『良臣』

續いて本章では、清華大學藏戰國竹簡（以下、清華簡と略記）を取り上げる。この資料は、香港で購入され二〇〇八年に清華大學に寄贈された戦國竹簡であり、総数は残片を含めておよそ二五〇〇點、内容は『尚書』およびそれに類した經書や編年體の史書などを中心とする六十篇以上の書籍からなる。盗掘品であるため出土地は明らかにされていないが、年代は戦國中晩期と推定されており、炭素年代測定およ

び年輪補正による紀元前三〇五±三〇年という結果もそれを裏付ける。³⁶⁾

ここで留意すべきは、同じ書籍類に属しながら、郭店簡・上博簡が思想書を中心とするのに對して、清華簡は歴史書を中心とし、両者は種別を異にする点である。さらに國別の面でも、郭店簡・上博簡には齊系文字との關連が見られたのに對して、清華簡には晉系文字との關連が指摘されており、³⁷⁾ 兩者の文字には相異なる地域との結びつきが認められる。以下では、清華簡の中でも晉系文字との間にとくに緊密な關連をもつ『良臣』を中心にみていこう。

『良臣』は全十一簡からなり、黃帝から春秋にいたる著名な君主とそれに仕えたすぐれた臣下の名を列擧した文獻である。竹簡中に篇題は見えず、内容から「良臣」と命名された。『清華大學藏戰國竹簡(參)』の「説明」³⁸⁾は、竹簡の文字は三晉系の寫法に屬するとし、その具體例として「百」字をすべて「全」に作る點をあげ、さらに内容面でも「子産之師」、「子産之輔」など鄭の子産との關連が詳記されることから、作者は鄭と密接な關係をもつ人物であった可能性を指摘している。秦や楚では、殷の甲骨文や西周金文以來の傳統的な「百」が踏襲されたのに對し、戰國期の晉を中心とする中原地域では「百」をあらわす文字として「全」が用いられ、周邊の齊や燕でも行なわれた。³⁹⁾ 『良臣』にみえる「全(百)」の二つの用例(簡八・簡一〇)のうち、子産の輔の一人としてあげられた「王子全(百)」(傳世文獻未見)の名が記された簡一〇を掲げておく〔圖9〕。

〔圖9〕『良臣』簡一〇(末尾部分)

……王子全(百)



さらに劉剛氏は、文字風格および文字形體・用字習慣の面から詳細な検討を加え、『良臣』と晉系文字との緊密な關係を明らかにしている。⁴⁰⁾ 以下では『良臣』簡六の齊の桓公と管仲の名が記されている部分から、劉氏が指摘する文字風格の例として第四字めの「又」、文字形體の例として第六字めの「寺」をあげてみよう〔圖10〕。

〔圖10〕『良臣』簡六(部分)

……齊桓(桓)公、又(有) 龠[管] 寺(夷) 虛(吾)、……



・文字風格……『良臣』の「又」字の筆劃は謹飭で直線的に構成され、晉系の侯馬盟書と類似し、楚文字の特徴である曲線的な筆劃と異なる(楚の「又」字については上掲〔圖4〕郭店『老子』乙簡七、第四字め・第十字め参照)。

・文字形體……『良臣』の「寺」字は、下部が「又」と「丶」からなる「寸」に従い、晉系および秦系の形體と合致し、下部を點の無い「又」に作る楚系および齊系の形體と異なる。

次に、上述した第一人稱の用字との關連から「虛」字を取り上げ、『良臣』と晉系文字との關係を検證してみよう。注目されるのは〔圖10〕

の第七字め、管仲の名である「夷吾」の「吾」に對應する文字に「虚」が使用されている點である。これは一見すると楚の用字の反映かと思われるが、第三章でふれたように晉では「虚」を姓字（複姓）の一部に用いた例があり、固有名詞の表記という點において『良臣』の用例は晉の用字習慣と合致し、楚の馴化を示すものとは見なされない。

ここに例示したのはごく一部であるが、私見によれば、文字・書法の両面において『良臣』には書寫者が楚人であることを示す明瞭な痕跡は認められないようである。清華簡以前に知られていた郭店簡や上博簡などの非楚系要素をもつ書籍類は、その度合いに差はあるものすべて楚の馴化を被っており、楚地出土の戦国竹簡はすべて楚人が書寫したものと見なされていた^⑪。これに對して『良臣』はきわめて純度の高い非楚系のテキストであり、これまでに例のなかった、晉系の文字・書法を習得した書寫者の手になる可能性が指摘される^⑫。

このように、郭店簡に續く上博簡・清華簡の發見によって國別研究は大きく進展し、今日では、周鳳五氏が提起した他地性文獻における馴化の度合いを、言語學的に把握することが可能となった。最後に本稿で取り上げた文獻を例に、馴化の度合いを段階的に整理しておこう。

〔第一段階〕 馴化の痕跡がほとんど見られず純度の高い非楚系テキスト

トの段階……(例) 清華簡『良臣』

〔第二段階〕 馴化があまり進行しておらず全體的に濃厚な非楚系要素

が認められる段階……(例) 上博簡『緇衣』

〔第三段階〕 馴化が進んで部分的に非楚系要素が残留する段階……(例)

郭店『五行』

〔第四段階〕 馴化が最も進行し全體が楚の用字習慣によって改寫された段階……(例) 郭店『緇衣』

結 語

本稿は、本誌編集擔當の佐藤信弥氏から「戦国竹簡入門」執筆の依頼をうけて作成したものである。

執筆にあたって、新資料の發見と關連づけながら、具體的な事例を中心に研究の展開を解説していく方針をとったが、取り上げることのできた研究は管見のごく一部にとどまる。例えば、戦国竹簡と甲骨・金文との緊密な連繫を特色とする陳劍氏の古文字考釋^⑬や、簡帛文字の書法・筆跡など個人差のレベルにまで踏み込んだ分析を特色とする李松儒氏の字迹研究等々、言及できなかった重要な研究は枚舉にとまがない。

本稿が、戦国竹簡文字の研究に關心を寄せ、さらに進んでこれらの論著をひもといていただくための一助となれば幸いである。

注

- (1) 李學勤『古文字學初階』第四六〇頁（中華書局、一九八五年）參照。本書の邦譯に小幡敏行譯・佐野光一閱『中國古代漢字學の第一歩』（凱風社、一九九〇年）がある。
- (2) この區分は、何琳儀『戦国古文字典—戦国文字聲系』（中華書局、一九九八年、二〇〇四年重印版）には程燕『《戦国古文字典》訂誤』を付す、湯餘惠主編『戦国文字編』（福建人民出版社、二〇〇一年）などに採用されている。
- (3) ⑩⑫は盜掘によって流出した非發掘簡で出土地は不明であるが、⑩は

竹簡に付着した土質の分析から湖北省の出土と推定されている。なお、これらが主として楚地で書寫された文獻であることは、後述する用字の分析からも裏付けられる。秦簡・漢簡を含めた簡牘の出土については、拙稿「中國の出土事情―出土の條件―」『墨』第一九一號、第二四〇二七頁（藝術新聞社、二〇〇八年）参照。

- (4) 荆門市博物館『郭店楚墓竹簡』第一～二頁、前言（文物出版社、一九九八年）参照。
- (5) 李零『郭店楚簡校讀記』、附錄一「郭店楚簡研究中的兩個問題」第一九三頁（北京大學出版社、二〇〇二年）
- (6) 郭店『語叢一』第三一簡＋第九七簡と「禮記」坊記篇との對讀によって、「度（ㄉㄨ）」字の釋讀の突破口が開かれたのは、その代表的な例の一つである。李天虹「釋楚簡文字“度”字」、『華學』第四輯、第八五～八八頁（紫禁城出版社、二〇〇〇年）参照。
- (7) 李零『簡帛古書與學術源流（修訂本）』第一八四頁（生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇八年第二版）
- (8) 李零『郭店楚簡校讀記（增訂本）』第一九二頁（前掲注5）、大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』第九一～一四頁（大西克也氏執筆）「5 屈原の書いた漢文―戰國時代の楚の言語表記システムと國ごとの違い―」（財団法人放送大學教育振興會、二〇〇九年）、周波『戰國時代各系文字間的用字差異現象研究』第四七～四八頁（綫裝書局、二〇一二年）参照。
- (9) 中國社會科學院考古研究所『殷周金文集成 修訂增補本』第六冊 09710、第五〇九五頁（中華書局、二〇〇七年）
- (10) 故宮博物院編・羅福頤主編『古璽彙編』第二八八頁 3056・第三一八頁 3411・第三二〇頁 3333（文物出版社、一九八一年）
- (11) 唐蘭『壽縣所出銅器後略』、『國學季刊』第四卷第一號、一九三四年、故宮博物院編『唐蘭先生金文論集』第一七～二四頁（紫禁城出版社、一九九五年）再收
- (12) 郭沫若『壽縣所出楚器之年代』、『古代銘刻彙考續編』（文求堂、一九三四年）、郭沫若著作編輯出版委員會編『郭沫若全集 考古編 第五卷』第八六〇頁（科學出版社、二〇〇二年）再收。
- (13) 例えば、劉節『壽縣所出楚器考釋』、『古史考存』第一一二～一三頁（人民出版社、一九五八年）、白川靜『金文通譯』二二七、『白鶴美術館誌』第四〇輯（一九七三年）、白川靜著作集 別卷 金文通釋 4 第五五二～五五五頁（平凡社、二〇〇四年）再收、馬承源主編『商周青銅器銘文選 四』第四五三～四五四頁（文物出版社、一九九〇年）などがあげられる。
- (14) その後『藝文類聚』や『太平御覽』などの佚文から、第一組竹簡は、申

徒狄と周公との問答を記した佚書（篇）であることが明らかにされている。李學勤「長臺關竹簡中的『墨子』佚篇」、『簡帛佚籍與學術史』第三四一～三四八頁（臺北・時報文化出版企業有限公司、一九九四年）、李零「長臺關楚簡《申徒狄》研究」、『簡帛古書與學術源流（修訂本）』第一九一～二〇八頁（前掲注7）参照。

- (15) 劉雨『信陽楚簡釋文與考釋』、河南省文物研究所『信陽楚墓』第二二五頁（文物出版社、一九八六年）。なお併せて郭店簡出土後の李零氏の釋讀（前掲注14、第一九三～一九四頁）を掲げておく。
……而君天下。吾聞周公…… 簡一二
……吾豈不知哉夫。周公…… 簡一四
- (16) 李家浩「從曾姬無卣壺銘文談楚滅曾的年代」、『文史』第三三輯、第二一～一八頁（一九九〇年）
- (17) 『郭店楚墓竹簡』第一一六頁（前掲注4）「老子釋文注釋」〔五二〕。郭店楚簡の用例の内譯は以下の通り。
「虚」〔五〕 十二例……「老子」六例（甲二例、乙四例）／『繡衣』二例
／『魯穆公問子思』二例／『窮達以時』一例／『語叢二』一例
「虚（乎）三例……「成之間之」一例／『六德』二例
なお「虚（乎）」の用例のある『成之間之』と『六德』との二篇は書風の合致から同一の書寫者とみなされるが、兩篇とも別の簡所では「乎」の表記に楚簡習見の「虚」を用いており、「虚（乎）」の用字は音の共通性による通用とみられる。張光裕主編『郭店楚簡研究 第一卷文字編』第三五八頁（藝文印書館、一九九九年）参照。
- (18) 湯餘惠「略論戰國文字形體研究中的幾個問題」、『古文字研究』第十五輯、第三七頁（中華書局、一九八六年）参照。
- (19) 李守奎・曲冰・孫偉龍編著『上海博物館藏戰國楚竹書（一―五） 文字編』、第二六七～二六八頁（作家出版社、二〇〇七年）
- (20) 郭店楚簡以後の研究を踏まえた曾姬無卣壺銘文の釋讀については、黃德寬「曾姬無卣壺銘文新釋」、『古文字研究』第二三輯、第一〇二～一〇七頁（中華書局、二〇〇二年）参照。
- (21) このような用字重視については、李零『郭店楚簡校讀記』、附錄一「郭店楚簡研究中的兩個問題」第一九三頁（前掲注5）、裘錫圭『戰國文字及其文化意義研究』緒言、復旦大學出土文獻與古文字研究中心編『出土文獻與古文字研究（第六輯）―復旦大學出土文獻與古文字研究中心成立十周年紀念文集』上冊、第二二頁（上海古籍出版社、二〇一五年）参照。また用字差異を中心とする研究に周波『戰國時代各系文字間的用字差異現象研究』（前掲注8）などがある。

- (22) 何琳儀『戰國古文字典—戰國文字聲系』上冊、第五〇六・八〇一頁(前掲注2)、李守奎『楚文字編』第六二頁(華東師範大學出版社、二〇〇三年) 参照。
- (23) 大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』第一一三頁(前掲注8)、周波『戰國時代各系文字間の用字差異現象研究』第四七〇・四八頁(前掲注8) 参照。
- (24) 裘錫圭『甲骨文中に見る「視」』、『甲骨文發現一百周年學術研討會論文集』(文史哲出版社、一九九八年)、裘錫圭『學術文集1・甲骨文卷』(第四四四・四四八頁(復旦大學出版社、二〇〇二年)) 再收、裘錫圭『以郭店《老子》簡為例談談古文字考釋』、『郭店楚簡與儒學研究 中國哲學第二輯』(遼寧教育出版社、二〇〇〇年)、裘錫圭『學術文集2・竹簡帛書卷』(第二七五・二八二頁(上掲)) 再收、裘錫圭『戰國文字及其文化意義研究』(緒言)、復旦大學出土文獻與古文字研究中心編『出土文獻與古文字研究』(第六輯) 復旦大學出土文獻與古文字研究中心成立十周年紀念文集』上冊、第二二五・二二七頁(前掲注21) 参照。
- (25) 『郭店楚墓竹簡』第一一四頁(前掲注4)、「老子釋文注釋」(六)、張光裕主編『郭店楚簡研究 第一卷文字編』第三六六・三六八頁(藝文印書館、一九九九年) 参照。
- (26) 張光裕主編、袁國華合編『包山楚簡文字編』第三三七頁(藝文印書館、一九九二年)、李守奎、賈連翔、馬楠編著『包山楚墓文字全編』第三五八頁(上海古籍出版社、二〇一二年) 参照。
- (27) こうした古代の用字習慣の解明は、古文字學のみならず傳世文獻の本文化訂にも新たな局面を拓いている。この点については、陳劍『據戰國竹簡文字校讀古書兩則』、『第四屆國際中國文字學研討會論文集』、香港中文大學中國語言及文學系、二〇〇三年、陳劍『戰國竹書論集』第四五四・四五七頁(上海古籍出版社、二〇一三年) 再收参照。
- (28) 以下の楚墓出土竹簡における文書類と書籍類との区分については、湯淺邦弘編著『概説 中國思想史』第二七〇・二八六頁(福田哲之執筆)、『第十四章 文字學』▼コラム 戰國文字の分立と混淆(ミネルヴァ書房、二〇一〇年)と重複する部分がある。
- (29) 周鳳五『郭店竹簡的形式特徵及其分類意義』、武漢大學中國文化研究院編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』第五三・六三頁(湖北人民出版社、二〇〇〇年)。
- (30) この点については、拙稿「楚墓出土簡牘文字における位相」、『中國研究集刊』第三二號(大阪大學中國學會、二〇〇二年)、淺野裕一編『古代思想史と郭店楚簡』第三五三・三七六頁(汲古書院、二〇〇五年) 再收、馮勝君『郭店簡與上博簡對比研究』第二五〇・二五九頁(綫裝書局、二〇〇七年) 参照。
- (31) 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書(一)』第一・四頁、馬承源「前言 戰國楚竹書的發現保護和整理」(上海古籍出版社、二〇〇一年) 参照。
- (32) 馮勝君『郭店簡與上博簡對比研究』第六三・一八七頁(前掲注30)。
- (33) 周鳳五『郭店竹簡的形式特徵及其分類意義』第五九頁(前掲注29)、馮勝君『郭店簡與上博簡對比研究』第三二〇・三二七頁(前掲注30)。
- (34) こうした第一人稱の用字にかかわる金文資料の類例として、書也缶(繡書缶) があげられる。これは現在、中國歴史博物館に所蔵される傳世の銅器であり、銘文中に春秋中期の晉國の執政として史書にも登場する「繡(繡)書」の名がみえることから、春秋中期の晉器とされきた。しかし器形が春秋末から戰國にかけての楚の形式と合致し、銘文の書式や書體も楚と共通することから、晉器とはみなしがたく、晉を出奔した樂書の子孫が楚地で作成したものと推測されている。ここで注目したいのは、このように濃厚な楚風をもちながら、銘文中の第一人稱には楚の「虛」ではなく「慮」が用いられている点である。これは恐らく樂氏の本國である晉の用字をとどめたものであり、本器のもつ複雑な製作事情を雄辯に物語っている。この問題については、甌燕「樂書缶質疑」・王冠英「樂書缶應稱名爲樂盈缶」、『文物』一九九〇年第二期、劉彬徽「論東周青銅缶」、『考古』一九九四年第一期参照。
- (35) 上博楚簡の國別や用字差異を中心とした研究に、蘇建洲『《上博楚竹書》文字及相關問題研究』(萬卷樓、二〇〇八年) などがある。
- (36) 清華大學出土文獻研究與保護中心編、李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』第一・四頁、「前言」(中西書局、二〇一〇年) 参照。
- (37) 例えば清華簡《筮法》文字與文本特點略説、『深圳大學學報』(人文社会科学版)第三十一卷第一期、第五八・六二頁、二〇一四年参照。
- (38) 清華大學出土文獻研究與保護中心編、李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(參)』下冊、第一五六頁(中西書局、二〇一二年)、『良臣』の釋文・注釋擔當は沈建華氏。
- (39) 湯餘惠主編『戰國文字編』第二二五頁(前掲注2)、何琳儀『戰國古文字典—戰國文字聲系』第六〇三・六〇四頁(前掲注2)、大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』第一一〇・一一一頁(前掲注8) 参照。
- (40) 劉剛『清華參《良臣》爲具有晉系文字風格的抄本補證』(復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站、二〇一三年一月十七日)、『中國文字學報』第五輯、第九九・一〇七頁(商務印書館、二〇一四年) 再收。
- (41) 馮勝君『郭店簡與上博簡對比研究』第二五〇・二五四頁(前掲注30) 參

照。

- (42) この点についての詳細は、拙稿「清華簡『良臣』・『祝辭』の書寫者―國別問題再考―」、「中國研究集刊」第六二號、第五二―七三頁（大阪大學中國學會、二〇一六年）参照。
- (43) 陳劍『甲骨金文考釋論集』（綏裝書局、二〇〇七年）、陳劍『戰國竹書論集』（前掲注27）
- (44) 李松儒『戰國簡帛字迹研究―以上博簡爲中心』（上海古籍出版社、二〇一五年）

圖版所據文獻

- [圖1] 劉彬徽・劉長武『楚系金文彙編』第三九二頁（湖北教育出版社、二〇〇九年）
- [圖2] 故宮博物院編・羅福頤主編『古璽文編』五・五、341、一〇八頁（文物出版社、一九八一年）
- [圖3] 河南省文物研究所『信陽楚墓』圖版一一四（文物出版社、一九八六年）
- [圖4] [圖5] 荆門市博物館『郭店楚墓竹簡』第七・九頁（文物出版社、一九九八年）
- [圖6] [圖7] 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』第二〇六・二〇一頁（上海古籍出版社、二〇〇一年）
- [圖8] 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（二）』第一九八頁（上海古籍出版社、二〇〇一年）
- [圖9] [圖10] 清華大學出土文獻研究與保護中心編 李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡（參）』上册、第九五・九七頁（中西書局、二〇一二年）

〔附記〕 本稿はJSPS 科研費 24520466 の助成による研究成果の一部である。

（島根大學教育學部教授）

